第40回公演「久美・美容室物語」
団長の独り言

「久美・美容室物語」その4

２月１２日（土）初日の朝、晴天！２日前、天気予報どおり雪が結構降り、どうなることかと心配したがさすが晴れ劇団！劇団ふぁんハウスは創立２４年目で４０回公演を迎えるのだが、初日 の朝、雨や雪に見舞われた事って一度もないんですよ。

今回も「真っ青な空」の下、平野カーに乗り込む平野家の面々は、いざ「赤坂」へ！・・・と言いたいところだが、劇場には車の止め置きが出来ないので、赤坂ではなくいざ新宿へ！車のオーディオを操作して流す曲は劇団ふぁんハウスの「団歌」でもあるハウンドドッグの「フォルティシモ」。この曲で気合を入れて劇場へ向かうのは、第１回公演の初日の朝からずっと続いているので、これもゲン担ぎのひとつ。今では初日の朝しか聞かない曲となっているので、妙に新鮮で、心が昂ぶり気合が入る。

♪「激しくたかぶる夢を眠らせるな！あふれる思いをあきらめはしない！愛がすべてさ、いまこそ誓うよ、愛を込めて強く強く！」♪

何度となくリピートして流していると新宿の駐車場に到着。ここから電車に乗り換え、赤坂区民センターへ。

劇場の最寄り駅となる青山一丁目駅に到着するとドトールコーヒーに行き、モーニングセットを頼み、朝食を済ませ劇場に入り。

劇場内に入るなり女子楽屋男子楽屋と顔を出し、挨拶をしつつさりげなく全員いるかどうかの確認をすれば、よ～し！全メンバーが顔を揃えております。

こうして全員集合しているのが当たり前でない今の世の中、笑顔で全員が楽屋に顔を揃えているのは、とてもすごい事。

約３０分後、出演者スタッフ全員がステージに集合し、まずは成功祈願から。舞台中央に「明治神宮」のお札の入った「お社」を供え、その「お社」を取り囲むように全員が整列をして、二礼二拍手一礼、神主係のアマティアズの祝詞、一礼という神式に則っての成功祈願を行い、関係者全員の気持ちをひとつにし、私からの挨拶、舞台監督の高橋さんからの注意事項等があり、早速「例の問題点」をどうするか？ってところから場当たりを始める。

「例の問題点」というのは・・・今回の芝居で巨大なスクリーンを使ってある映像を大きく映し出す場面があるのだが、劇場備え付けのスクリーンが下りてくるのに１分３０秒もかかってしまうって事が判明した。

さすがに場面と場面の間で真っ暗闇の暗転を１分３０秒ってのはありえない。

舞台監督の高橋さんがこの事実を伝えに来たのは、ちょうど前日の照明さんのシュート作業の真っ最中だった。

「団長、劇場入り前に確認すべきだったのですが、スクリーンが下り切るのに１分３０秒も掛かってしまうんです・・・確認をしなかった僕のミスです」との事。

でもね、これは私も高橋さんと同じ感覚だった。

６、７年前、こちらの劇場で、やはり巨大スクリーンを利用しての芝居を行った事があったのだが、私も高橋さんも、確かにゆっくりスクリーンは下りていたという感覚はあったにせよ、時間が掛かった記憶がなかったので、いやはや・・・私も高橋さんも油断してしまっていた。

だから高橋さんのミスだなんて！そんなことはないですよ。

むしろよくぞ場当たりが始まる前に、ちゃんと確認してくれたものだ！と私はそのことに感心をした。

まだ場当たりが始まる前に気づいてくれたので、いくらでも対処方法はある。

そこで高橋さん案としては、「場面が終わる→中割幕が閉まる→スクリーンを下ろす」という当初の予定ではなく、芝居の途中でアマティアズのＢＧＭが入り、照明が変化するそのタイミングで、芝居はまだ続いているけれど、中割を早々に閉めてしまい、早めにスクリーンを下ろしてはどうか？との事。

一方の私の案としては、中割幕がしまったあとに新たなシーンを創るので、幕前で二人の役者に芝居を行ってもらいながら時間稼ぎをして、その間にスクリーンを下ろすという案。

高橋さん案の問題点は、タイミングで大丈夫なのか？やってみなきゃ分からないというところと、役者も芝居中に幕が閉まる事になるので、幕が閉まるタイミングで、上手く幕前に出られるか？どうかって事。

私の案の問題点は、短いシーンとはいえども本番直前のこの期に及んでシーンを追加してしまうと、役者がちゃんとセリフを覚え対応出来るのか？っていうところ。

まぁーでもね、どちらの案にせよ、私も高橋さんも、長年の経験から「なんとかなるさ」って、どこかで思ってはいるので、そんなに焦っちゃいない。

焦っちゃいないけれど、今回の場当たりでの一番の問題点であるには違いない。

だから昨日の場当たりは、比較的ハイテンポで進めて、今日のこの「スクリーン問題」にかなりの時間を割く予定のようだ。

私は、皆さんに動きが変わる旨をまずは説明をする。

「高木の『錦ヶ浦？ってあの・・○○で有名な！？』でアマティーのピアノが入りますので、そしたら皆さん、中割幕よりも前に出ながら芝居をしてください。」

事前に何の説明も受けていない役者達の頭の中は？？？だらけだけど、高橋さんが私の補足で事の成り行きを説明すると皆さん、なんとなく理解したようで、とにもかくにも、スクリーンが下りる場面をやってみると・・ダメだ・・・。
スクリーンを下ろすタイミングを早めたのに、次のシーンの「錦ヶ浦」の芝居が始まっても、まだスクリーンは動いている・・。

高橋さん、私、転換スタッフさんとで「じゃーどうするか？」を考えるが、落ち着いてゆっくり議論する時間はないので、ここはもうヒラメキでパッ！パッ！と決めなきゃいけない。

平野「シーンを追加しましょうか？」
高橋「いえ！スクリーンを下ろすタイミングをもっと早めてみます。」
平野「ってことはまだ照明が変化する前ってこと？」
高橋「そうです。団長、客席に座って、スクリーンが下りて来るのが気になるか？確認してもらえますか？」

高橋さんに言われるがまま私は客席のやや前の方に座り、どのタイミングでスクリーンが下りてきているのか？
注意しながらこのシーンの芝居を見守っていると、芝居の途中からスクリーンが下りてきているはずなのに、下りて来るのは全く分からない。

よーくよーく更に注意して下から上を見上げると、スクリーンが下りてきているのが確認出来るけれど、お客様は、おそらく芝居の最中にスクリーンが下りて来ても気にならないレベル。
スクリーンが徐々に下りてきても芝居は続き、やがてアマティアズのＢＧＭが入り、照明が変化して中割幕が閉まる。
そして舞台は暗転となり、「熱海～熱海～」というＢＧＭが流れ、それとクロスするように中割幕が開き、カモメの鳴き声と共に舞台に明かりが入ると、ちゃーんとスクリーンは下り切っていた。
「高橋さん！スクリーンが下りているの全然分からなかった！すごい！」
私は思わず叫んでしまう。

ただこのスクリーンを下ろすタイミングってのは、高橋さんの肌感覚に掛かっている。なにせほら芝居は生ものなので、役者のしゃべるテンポって、その時によって微妙に違うから、職人の技にかかっているってところだね。

そのハラハラドキドキの問題点も難なくクリアーし、場当たりは順調に進み、最後のクライマックス、そしてエンディングのフィナーレと順調に進み、場当たりは終了となる。
時計に目をやれば１１時！あと１時間でゲネプロ開始となるのでした。